

シッダの元で

バーバ・ムクターナンダについての逸話

I

2014 年、バーバの太陽暦のマハーサマーディ前夜、私は夢を見ました。私が輝く黄金色のホールに入ると、そこには黄金色の衣を着たバーバが座っていました。バーバに向かって長く延びる黄金色のじゅうたんの上を歩いていくと、私は心の中で深い崇敬の念を感じました。私はバーバの足元に頭を垂れると、泣き始めました。まるで何千年もの年月が過ぎ去り、数え切れない回数の人生のカルマが、私から取り払われていくように感じました。ようやく顔を上げてバーバを見上げると、バーバは優しくほほ笑んでいました。私たちは共に笑い始めました。

バーバがマハーサマーディを迎えてから 10 年後に生まれたにもかかわらず、私はいつもバーバと共にいて、バーバはいつも私と共にいる、という理解と共に、私は目を覚ましました。

この夢は、私にとって安息の地であり続けています。バーバから離れたり遠くに感じるときはいつでも、私はあの黄金色のホールを再訪し、バーバのダルシヤンを再び受けるのです。

アメリカ合衆国、ユタ州のシッダ・ヨーギ

1978 年の夏、私は非常に幸運にも、当時バーバが滞在するグルデーヴ・シッダ・ピートゥで夏の休暇を過ごすことができました。アンナプールナーのキッチンでセーヴァーをささげ、野菜を切ったり、食事を出したり、ダイニングホールを掃除したりしました。

ある朝、私がアンナプールナーの床をモップで掃除していると、バーバがダイニングホールを歩いてキッチンに入って来ました。バーバが通れるように、私はモップの手を止めました。バーバは私を見て、私の存在を認める一瞥^{いちべつ}をくれました。その瞬間、高揚感の波が押し寄せるのを感じました。私は信じられない喜びでいっぱいになったのです。

バーバのほんの一瞥が、私を至福で満たし、一見すると平凡なセーヴァーを特別な体験に変えたのです。

この体験を熟考するとき、私は大いなる自己の至福は常に自分の中にあることに気づきます。シッダ・ヨーガの修行をし、修行の効果を自分の生活にあふれさせることによって、私はますますこの祝福の体験とつながり続けることができます。

英国、ロンドンのシッダ・ヨーギ

1979 年の大みそか、力強い夢の中にバーバが現れ、私はシャクティパートを受け取りました。夢の最後に、私は叫びました。「バーバ、バーバ、私は愛が何かもわかりません」。バーバは答えました。「しいー。新しい年が終わるまでに、おまえは愛とは何かがわかるだろう」

新年の朝、私は意識が広がった状態で目覚めました。深い安らぎの感覚が私を満たしていました。まだ私はシャクティパートを受け取ったことを理解していませんでした。私が一生かけて探してきた愛の体験を 1 年足らずで与えるという約束を、どうやってバーバはかなえてくれるのだろうと思いました。

そして、1980 年 12 月 23 日に娘が生まれて程なく——その年が終わるちょうど 8 日前に——私はバーバが言わんとしたことを理解したのです。娘との関係、そして娘が私の中に呼び起こした母としての愛を通して、バーバが愛について教えていることに、私は気づいたのです。

バーバの恩恵と深遠な祝福を通して、私の人生は愛の実りに花開きました。これは、私へのバーバの遺産です。バーバが私に発見させたこの愛は、サーダナーの中で私に強さを与え続けています。

アメリカ合衆国、カリフォルニア州のシッダ・ヨーギ

1976 年、私は初めて参加したシャクティパート・インテンシヴで、バーバからシャクティパートを受け取りました。30 年後の 2006 年、「心への巡礼」のリトリートに参加するため、私はグルデーヴ・シッダ・ピートゥを訪れました。あるとても暑い午後、部屋で休んでいる時、私は眠っているでもなく、夢を見ているでもなく、他のなじみある状態でもないどこかを漂っていました。きらきら光る半透明な姿に気づきました。すぐさまそれはバーバだとわかりました。本当に信じられませんでした！バーバにまた会えるなんて、息をのむような驚きです。バーバが重力の無い、時を超えた恍惚^{こうこつ}の空間で楽しそうに踊るのを、私は畏敬の念で見詰めていました。バーバとバーバを認識する自分だけが存在していました。

やがて意識が自分の部屋に戻りました。私は驚き、そしてバーバがシッダローカにいることを確信しました。グルの恩恵を通して、私は意識の中で、この軽やかな光に満ちたシッダたちの世界、より霊妙で性質が全く違いながらも私たちの世界と同じくらい現実の世界に運ばれたのです。驚きと共に、私はこの体験の真実を認めました。それは、私の胸の心臓の鼓動と同じくらい本当のことだとわかりました。

グルデーヴ・シッダ・ピートゥのその午後、私は、グルと弟子の関係は常に存在し永遠なのだと理解しました。この真実が、私を瞑想へと鼓舞し、それによって私は心の内側で、バーバとグルマーイに何度もつながることができるのです。

アメリカ合衆国、マサチューセッツ州のシッダ・ヨーギ

1976 年、2度目の世界ツアーの終わりに、バーバはヨーロッパへ行きました。バーバが訪れた国の一つがドイツで、そこでバーバは、夏の狩猟のために使われていたバイエルン・アルプスが見える城に滞在しました。

滞在中のある晩、私はダルシャンの列でバーバに近づき、いつも通りプラナムをささげました。この時、私が立ち上がると、私の目は真正面からバーバの目と合いました。それはまるで、バーバの目を通して、その向こうに横たわるもの——広大で深い愛の海——を見たかのようでした。同時に、それは完全に無条件の愛だとわかりました。もし、私がその海と一つになりたいければ——もちろん私はそう望みました——分離と相違のすべての考えを手放さなければならないのだとわかりました。自分の小さなエゴとの同一視を捨てなければならないのです。私は、この先に待ち受けるものの大きさに気づいて身震いしました。それでも私は、垣間見たその境地の軽やかさ、完全な自由、恍惚感を覚えていました。そして私は、川が海に身を委ねる時、川は己の小ささを捨てて海の力と壮大さに溶け込み海になる、というバーバの教えを思い出しました。

これが大いなる真理であること、そして私はその真理を追究するために人生をささげるのだということがわかったのです。

シッダ・ヨーガ・スワーム